



主張作文から学ぼう 大切なのは人と心での「つながり」



少年の主張から

町では毎年、小学五年生と中学三年生が「少年の主張作文」に取り組みます。今年度も各校の代表者が決まり、原稿が届きました。

テレビや新聞には「本日の感染者が都内3桁を越える」や「他県ナンバーの車への嫌がらせ」など、心が重くなるニュースが多いです。不安や恐怖心を煽るニュースに触れる機会が多いと、正しい判断力を鈍らせ、必要以上に他者に厳しくあたると、人権問題に直結していると感じます。そんな中、届いた主張作文には、「地域の絆」、「養老町の良さ」、「当たり前こそかけがえないこと」、「本当の友達・関わり方」、「情報共有のあり方」など、考える時間がたっぷり休校中だからこそ見つけられた新しい見方や考え方が表現されていました。今回のシリーズ人権では、最優秀賞のお二人の主張をご紹介しますが、「人を大切にすること」について考えてみたいと思います。

今のぼくにできること、誰かのためにできること

突然の休校で、家庭で過ごす時間が増えました。そんな時、目の覚めるニュースが流れます。自分と同じ小学生が「自分のお年玉を使ってマスクを手作りし、寄付をした」。休校中の自分は、「時間を自分のためだけに使っていた」ことに気づきます。人の行動から「ん？」と思って自分を見つめ直すことが人権感覚の第一歩です。考えたことは、地域の花壇に花を植えること。地域の人に喜んでもらいたい、気持ちを癒やしてもらいたいという願いを、行動に起こします。些細なことかもしれないけれど、「今、ぼくにできること」「誰かのためにできること」を考え、実行し、温かい社会を作っていくこととする姿が素晴らしいです。新型コロナウイルスにより、人との接触を制限されている今だからこそ、工夫を凝らして人とのつながりを絶やさないと課題の一つです。見事に解決している主張でした。

心で凸凹を理解する

「発達凸凹」という言葉との出会いから、「障がい」ではない」「ではなく、「苦手なことと得意なこととの差が大きいだけ」と気づき、心に変化が生まれました。障がいをもつ子の多くは、ある一面は、人より遅れているけれど、別の一面は人より優れていることもありま。だから平均の目線で見ると、その凸凹さが「障がい」として映ってしまうのだと分かってからは、障がいを抱える家族への見方も180度変わったようです。一生懸命努力をし、克服しようとしている姿に共感し、自慢と思えるまで変化しました。「心の目で相手の凸凹を見つめ、心のつながりを意識して過ごすことは、「相手の立場に立って考える」人権の基本を具現しています。凹の部分は助け合い、凸の部分は認め合いながら生活していけば、一人一人の人権を大切に世の中になると主張している点に感銘を受けました。「知らないから生まれる偏見」

は誰にでもあります。よく知らないことは憶測で話しがちです。よく知らないと、責任も少ないと捉え、無責任な言動につながるのとはとても残念です。だからこそ、情報を見極め、自分事として考えることが大切です。

さて、六月から学校が再開しました。学校で過ごす子どもたちの表情も、「友達と会えた喜び」「先生や友達と一緒に学習できる喜び」に溢れています。今まで、面倒や当たり前と感じていたことが、いざできなくなってみて、どれほど幸せなことなのかと気づきます。それは、大人も子どもも同じです。緊急事態宣言が解除され、「Withコロナ」となった今、人とのつながりを絶やさぬよう、主張作文が教えてくれました。今年度は、会場において主張発表が出来ませんでしたので、町HPに少年の主張審査結果を掲載しています。また、CCNetでも、最優秀賞の主張が9月3日から放映されます。併せてご覧ください。